

レーザー治療や粘膜切除術などに代表されるように、多くの消化管疾患治療において、内視鏡が重要な役割を演じていることは周知の事実である。こうした病気を“根治”する分野においては、本邦の内視鏡技術は世界をリードする立場にありながら、本書で述べられている“緩和”を目的とした分野においては、米国の後塵を拝しているといわざるを得ない。

米国では、政治、経済にとどまらず、医療界においても徹底した合理化、民主化が進められている。合理的な医療とは、すなわち理にかなった、無駄のない医療であり、民主的な医療とは、患者中心の医療である。患者にとって理にかなった医療を行う土壌が成熟している米国において、PEGや消化管ステントをはじめとする緩和内視鏡技術が速やかに普及したことは偶然ではない。一方、こうした優れた治療法が本邦では注目されにくかった理由は、日本の医学界が、政治、経済同様、主権在君的で、そのうえ、重厚長大を良しとしていたことと密接に関係しているように思われる。医療における主権在君は、すなわち医療者中心の医学であり、重厚長大は、延命を第一目標とした根治・拡大手術礼賛主義である。こうした風土が、本書で述べられている緩和医療の市民権獲得を遅らせたといっても過言ではない。21世紀の医療は、根治術のさらなる進歩のみならず、患者のQOLを最小限の侵襲で向上させ、いかに病気と共存するかが大きなテーマとなるであろう。その意味で、本書はこれまであまり注目されなかった新しい分野を切り開く画期的な著書である。

本書は、それぞれの分野の第一人者による全9章(178頁)から構成されており、消化管出血、狭窄、胆道狭窄、気道狭窄、経口摂取困難症(PEG)、消

化器病起因の疼痛(神経ブロック、剥離術)、膵嚢胞(ドレナージ)に対する内視鏡と胸腔鏡を用いた緩和(姑息)治療の実際を解説している。

多数の著者による執筆にもかかわらず、各章は一貫して同一の構成が保たれており、大変わかりやすい。各章ともその病態の背景、治療目的、適応、期待される成績、治療手技の実際、治療に必要な解剖、症例提示(著効例と失敗例)が、豊富で明解な図表(図131点、表31点)と285の引用文献で説明されている。緩和医療においてはQOLの向上が第一目的であるため、EBMにはなじまないが、各章ごとに治療成績がまとめられており、21世紀の医療をめざす編者の意図がくみとれる。また、各章にその分野の現状と将来展望が語られており、興味深い。緩和内視鏡治療におけるインターネットおよびトレーニング用シミュレーターの活用法を解説した章も大変参考になる。

本書で述べられている技術が適応される疾患は、多くの消化器・呼吸器疾患、さらには嚥下困難を合併する脳血管疾患、AIDSと多彩である。したがって、本書は内視鏡医にとどまらず、こうした疾患を扱うすべての医師、看護師、さらには21世紀の新しい医療のありかたを学ぼうとする医学生にとって必読の書であると考ええる。本書で述べられている治療は、必ずしも延命につながるわけではない。しかし、本書は、延命が医療のすべてではなく、患者のQOL向上も同等もしくはそれ以上に重要であることをすべての医療従事者に教えている。本書が日本における緩和内視鏡治療の普及にとどまらず、QOLを重視した“主権在患者”の医療の確立に貢献することを期待したい。

(B5判 192頁 定価(本体8,000円+税))
2002年 医学書院 刊